

I 導入部

おはようございます。12月の第一の日曜日を迎えました。アドベント（待降節）の第一の礼拝です。今日は愛する皆さんと共に、礼拝できますことを心から感謝致します。

2024年の最後の月を迎えました。一年の総決算の月です。2024年の最後にクリスマスがやって来ます。2024年に、私たち一人ひとりにも様々なことがありました。1月元旦には、石川県の能登で地震が起こり、2日の日には羽田空港で、旅客機と地震の援助のための輸送機が接触を起こし火災となりましたが、乗客は全員無事でした。いつまでも終わらない夏、夏の暑さに体は悲鳴を上げました。総理大臣指名や選挙等様々なことが起こり、その背後にある人間的な思いが浮き彫りにもなりました。私たちの個人的な生活の中にも、困難や苦しみ、悲しみや痛みがあったことでしょうか。絶望を経験されたのかも知れません。何があったとしても、2024年の締めくくりの月、12月にはクリスマスがやってくるのです。全世界の人々を、わたしやあなたを救い、神様が共におられることを知らせ、祝福を与えて下さるためにお生まれになったイエス様の誕生、クリスマスが確かにやってくるのです。私たちは、そこに目と心を留めたいのです。

今日は、マタイによる福音書1章16節から25節を通して、「**救い主誕生エピソード1**」という題でお話し致します。

II 本論部

一、苦難の中にある者に近づいて下さる神様

マタイによる福音書は、1章1節から17節まで、アブラハムから始まってイエス様に至るまでの42代の系図が記されています。来週は、この箇所から吉武神学生がみ言葉を語って下さいますから乞うご期待ください。父の系図が続いていますが、イエス様に関しては、1章16節には、「**ヤコブはマリアの夫ヨセフをもうけた。このマリアからメシアと呼ばれるイエスがお生まれになった。**」とあり、父の系図が突然母の系図に代わっているように思うのです。ルカによる福音書3章23節には、「**イエスはヨセフの子とされていた。**」とあり、マルコによる福音書6章3節には、「**この人は、大工ではないか。マリアの息子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではないか。**」とあります。父親の名前を付けて呼ぶのが当たり前の社会で、「**マリアの息子**」とは、あまり好意的な呼び名ではないように思うのです。マタイ、マルコ、ルカの福音書では、イエス様がヨセフの実子ではないことを示しているように思います。人間的に見れば、婚姻外の妊娠であり、社会においては不道徳とされるのです。

1章18節を見ると、「**イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。**」とあります。私たちは、普通父親と母親から生まれます。両親が揃っている時、母親の妊娠、子供の誕生は祝福となります。しかし、そうでない場合は母親の妊娠は大きな問題を招くことになるのでしょうか。ヨセフとマリアは、婚約中でユダヤでは、その期間は約一年間だったようです。その時にマリアは妊娠したのです。婚約はユダヤでは

結婚と等しく考えられていましたが、一緒には住んではいませんでした。ヨセフには全く身に覚えはありませんでした。19節には、「夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」とあります。ヨセフの苦悩がうかがえる言葉です。神様の選びに預かるということは、むしろ、苦しみや悲しみ、痛みや悩みを与えられるということがあるのです。「ヨセフは正しい人であった」の「正しい人」とは、神様の目には正しい人で、神様の言葉に従っている（律法に忠実な人、厳格な人、曲がったことの嫌いな性格）ということを示しているようです。ヨセフの知る律法には、「ある男と婚約している処女の娘がいて、別の男が町で彼女と出会い、床を共にしたならば、その二人を町の門に引き出し、石で打ち殺さねばならない。あなたはこうして、あなたの中から悪を取り除かねばならない。」（申命記 22:23-24）と記されているのです。

しかし、ヨセフは婚約中だったので、妊娠が人に知れる前に婚約を解消して表ざたにはしないで、ナザレの村でさらし者にはならないで済むと判断して、ひそかに縁を切ろうとしていたのです。ここにヨセフの苦悩、苦しみ、痛みがありました。けれども、神様はヨセフの苦しみをご存じであり、ヨセフのもとに天使を送るのです。私たちも、神様を信じて信仰生活を送る中で、様々な苦しみや悲しみ、痛みを経験します。その苦しみを誰も知らないと感じますが、神様だけは知っていて下さり救いの手を差し伸べて下さるのです。

二、救い主の使命を知る

20節、21節には、「このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」とあります。「ダビデの子ヨセフ」と天使は呼びかけました。「ダビデの子」と呼ばれるのは、新約聖書ではイエス様だけです。ヨセフは神様が自分の事を「ダビデの子」と呼ばれて、何か特別な啓示を与えようとしておられるのを感じたのかも知れません。天使は、「あなたはダビデ王の血筋を引いている。ダビデは信仰の人であり、神様を信じる信仰の力で国を救った信仰の人でした。あなたはその血筋を引いているのですから、私の言葉がわかるでしょう。」というようなことなのでしょう。恐れているヨセフに、「恐れず妻マリアを迎え入れなさい。」と言い、「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」とマリアの妊娠が姦淫ではなく、神様によって聖霊による妊娠であることがわかったのです。マリアの妊娠が、人間同士のものならば、ヨセフとマリアの間に生まれるならば、アダムの子孫として生まれてくることになり、罪の性質を受け継いで生まれてくることになり、生まれてくる子も罪人として生まれることになります。ですから、罪人が罪人のために十字架にかかって死んでも、罪の赦しはあり得ないのです。「マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。」ということがなければ、「この子は自分の民を罪から救うからである。」という使命に生きることは不可能なのです。アダムの子孫ではなく、「聖霊によって」生まれることが必要不可欠なのです。「マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。」と語り、マリアが妊娠している子は男の子であること、その子にイエスという名前を付けることが語られます。マタイが語る救い主の父としてのヨセフは、マリアに子どもを産ませることで自分の血筋を伝えるというのではなく、神様が「聖霊によって」与えられた子どもの命を守るという役割を果たすことになるのです。ヨセフは、こ

の役割のために生き、そのために備えられた人物でした。

私たちにも、それぞれに役割というものがあるのでしょうか。みんなが同じように経験しているという他の人と同じような役割が与えられるのではなくて、自分にしかできない役割を担うことがあるのでしょうか。他の人と同じではないから、ダメなのではなく、ある意味では、苦労や痛みは多いかもしれませんが、それこそ、神様が与えられた役割であるのですから、与えられた役割をヨセフのように、忠実に懸命に果たすことができるように、神様の恵みと憐れみとをいただいて、聖霊に助けをいただいて、歩みたいと思うのです。

三、いつでもどこでも共におられるイエス様

「この子は自分の民を罪から救うからである。」と生まれてくる子の使命がヨセフには語られました。創世記3章には、アダムとエバが罪を犯した後すぐに、神様は罪を犯し、裁かれるべき人間に対して、救いのご計画をお持ちになりました。その救いの現実が、イエス様の誕生、救い主の誕生を通して、具体的に示されたのでした。ヨセフは、神様の人類救済のご計画のために用いられるのです。22節、23節には、「このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。」とあります。今マリアに起こっている事実は、旧約のイザヤ書に預言されていることだと伝えます。イザヤ書7章14節には、「それゆえ、わたしの主が御自ら／あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み／その名をインマヌエルと呼ぶ。」という預言の言葉です。ユダヤ人なら誰でも知っているイザヤの預言なので、ユダヤ人には、ユダヤ人のヨセフには反論の余地がありませんでした。24節、25節には、「ヨセフは眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、男の子が生まれるまでマリアと関係することはなかった。そして、その子をイエスと名付けた。」とあるように、天使の語られた言葉を神様の言葉として、神様がかねてから預言者を通して語られていたみ言葉の実現のために、ヨセフは天使の命じた通りに、夢を通してでありましたが、神様の御心を受け留め、目覚めてすぐに、マリアを妻として受け入れ、生まれた子に「イエス」と名付けたのです。ヨセフは血のつながりによって、イエス様の父親となるのではなく、神様の定めに従って、生まれてくる子イエス様の父親となるのです。ヨセフは神様の召しに忠実に従った正しい人だったのです。こうして、救い主イエス様は、預言者の語った通りに、ダビデの家系から生まれることになったのです。

イエス様は救い主として、「自分の民を罪から救う」ために、人間の世界に遣わされたお方でした。イエス様は、神の国の到来を告げ、多くの人々を癒し、神様の言葉を解き明かし、人々を慰め励まし、弱さや貧しさの中にある人々と共に歩まれました。そして、全人類を罪から救うために、あなたを救うために、私やあなたの罪の身代わりにイエス様は十字架にかかり、父なる神様から裁かれ、尊い血を流し、贖いの供え物としてご自分の命をささげられ、死なれたのです。死んで墓に葬られましたが三日目によみがえらされ、罪と死に打ち勝たれたのです。イエス様の十字架の死と復活を通して、ユダヤ人だけではなく、全人類に、あなたに、罪の赦しと魂の救い、義とし、死んでも生きる命、復活の命、永遠の命を与えて下さるのです。このお方は、「その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」とあるように、いつでも、どこでも、何があっても、あなた

と共におられるのです。しかし、共におられると約束されても、「**本当にイエス様は共に
おられるのだろうか**」と疑ってしまうような苦しみや悲しみ、痛みや絶望さえも経験することが確かにあるのです。戦争、災害、地震、台風、事故と世界中で様々な苦しみは現実にはあるのです。大きな災いだけでなく、私たちの信仰生活の中でも、病気や怪我、事故、仕事や愛する者を失ったり、人間関係が破綻したりして、「**どうしたらいいのかわからない。
神様が共におられるなら、なぜこのような苦しみを経験するのか。**」と苦しむことが現実にはあるのです。けれども、そのような苦しみを経験するから、「**神様が共におられない**」という理由にはならないのです。むしろ、苦難や絶望の中にあるからこそ、神様が与えて下さった救い主イエス様に目と心を留めることを聖書は強く、熱く、私たちに呼びかけているのです。聖書が語る、聖書が示すイエス様は、何があっても、どのような苦難を経験しようとも、救い主イエス様の誕生、クリスマスは「**神は我々と共におられる**」ことの確かなしるしなのです。そのことを覚えたいのです。

III 結論部

私たちは、未来を正確に予測することはできません。優れた学者たちも、政治家たちも、宗教家も、未来を正確に予測することはできません。だからこそ、闇に光として現れた救い主イエス様に心と目を留めたいのです。神様が、イエス様が共におられるという事実は、神様が、私たちがあなたを愛しておられることの証しなのです。そのことを知ると私たちの見える世界は変わるのです。意味のないように見える無味乾燥な世界であっても、冷たい人ばかり、愛のない人ばかり、問題のある人ばかりいるような世界であっても、神様はこの世界を、この世界に住む人間を、私たちが、あなたをあきらめてはおられないのです。罪を犯したアダムとエバを決してあきらめたのではなく、人間が罪を犯した直後に、全人類を救うための十字架と復活の御業を用意されたのでした。希望のない私たちの人間の世界に、そこに生きている小さな一人を、弱い一人を、戦いの中にある一人を、苦しむ一人を、悲しむ一人を、絶望している一人を、神様は無視することなく、諦めることもなさらないのです。インマヌエルの神様は、いつでも、どこにいても、何があっても、あなたと共に生きようとして下さるのです。神様は、アドベント第一礼拝において、かけがえのないお言葉、神様の言葉を下さいました。それは、インマヌエルである救い主イエス様を証しする神様の言葉、聖書の言葉です。神様の言葉には、聖書の言葉には、いのちがあるのです。信じる者のうちに新しい命を宿すのです。私たちは、この週も神様の言葉、聖書の言葉を信じて私たちの内に宿したいのです。心と目に焼き付けたいのです。インマヌエルのイエス様は、いつでも、どんな時でも、あなたと共におられ、あなたを支え、あなたを守り、あなたを導いて下さるのです。この週も、イエス様が確かに共におられるので、ヨセフのように、理解できなくても、納得いかなくても、神様の言葉、聖書の言葉に触れて、どのような所に立たされていても、イエス様が共におられることを信じて、心配することなく安心して、全てをお委ねして、この週もイエス様と共に歩んでまいりましょう。